

シェイクスピアと犬

正岡 和恵

ステイーヴン・グリーンブラットのいささか控えめな表現を借りれば、「シェイクスピアは犬を嫌っていたように見える」(31)。もちろん、彼が実際に犬嫌いであったかどうかはわからない。だが、シェイクスピアの作品のなかで、「犬」(“dog”のみならず“hound”、“cur”、“mongrel”、“spaniel”などの関連語と具体的な犬種を含む)は——現実の犬、比喩としての犬のいずれを指すものであれ——、人に仕える動物のなかで「馬」と並んで頻出する語でありながら、「馬」が高貴さと結びつけられているのとは異なり、そのほとんどが否定的に用いられている。たとえば、「人殺しの犬」(『ヴェニス商人』1.3.111)、「犬のような心の娘たち」(『リア王』4.3.45)、「奴隷、卑しい悪党、犬!」(『アントニーとクレオパトラ』5.2.157)というふうに、犬は悪罵の対象であり、リチャード三世は犬と呼ばれることによって欺瞞や残酷という特質が強調される。シェイクスピアの犬は、“bloody”、“inhuman”、“common”、“thievish”などと形容され、唸り、嘔みつき、喧嘩し、キャロライン・スパージョンの古典的研究に登場するスパニエルのように甘くへつらい(195-99)、裏切る。現代のわれわれは、犬は人間の忠実な伴侶であると考えているが、シェイクスピアの作品では、狩猟犬など有用な仕事に従事する犬を除いて、犬はおおむね軽蔑的に描かれているのである。¹

シェイクスピアの犬に関する表象は、聖書、神話、プリニウスの博物誌、動物寓意譚、狩猟教本、詩的伝統など、先人から受け継いだ知識や定型表現によって形成されるとともに、言うまでもなく、現実の経験をもふまえていた。そこで注目したいのが、『イングランドの犬について』という、イングランドで最初の犬に関する書物である。この小冊子は、著名な内科医にして博物学者であるジョン・キーズが1570年にラテン語で著したもので、1576年にエイブラハム・フレミングによって英語に翻訳された。『リア王』と『マクベス』には、犬好きには見逃せない、犬の種類が列挙されている有名な箇所がある。“Mastiff, greyhound, mongril grim, /Hound or spaniel,

brach or [lym], / Or bobtail [tike] or trundle-tail” (3.6.68-70) および “Ay, in the catalogue ye go for men,/ As hounds and greyhounds, mungrels, spaniels, curs,/ Shoughs, water-rugs, and demi-wolves are clipt / All by the name of dogs” 3.1.91-4) である。ここにおいて、犬種は現在ほど厳密に特定されているわけではない。² しかしながら、この二つのリストは『イングランドの犬について』において記されている犬種や分類と同様であり、シェイクスピアが直接借用したかどうかに関わらず、同時代の主要な犬種はほぼ網羅されていると考えられる。シェイクスピアは作品中で、なかでもグレイハウンドに多く言及しているが、これはおそらく、グレイハウンドに野兎を追わせるコーシングという競技が盛んに行われていたためであろう。

キーズは、『イングランドの犬について』において、犬をまず大きく三つの範疇に分類した (2)。“a gentle kind” は上流階級の人々に飼われる犬で、狩猟犬と愛玩犬が含まれる。“a homely kind” は、労働者に飼われ使役される牧羊犬や番犬などを指す。“a currish kind” は、いわゆる雑種の駄犬で、吠えて人が来たのを知らせたり、台所で焼き串を回したり、芸をしたり、といった雑役に用いられる。“gentle”、“homely”、“currish” という語が示しているように、犬も人間社会の序列にのっとって階層化されていた。飼い主の身分やそれにとまなう生活様式によって飼われる犬の種類や用途が異なっていたため、犬も人間の位階に応じた階級と役割を与えられていたのである。人とこの犬とのこの照応関係のため、犬は人間社会の鏡として、あるいは人間社会を考察するための格好の参照枠として機能することになった。

なかでも有用性をもたない愛玩犬、すなわち最上位の “a gentle kind” に属する「繊細で、小綺麗で、可愛らしい種類の犬」(20) には、所有者の身分とジェンダーがはっきりと刻印されていた。キーズは愛玩犬を「スパニエル・ジェントル、あるいは慰め役 (カムフォーター)」(20) と呼んだが、それは定まった品種を指すものではなく、イアン・マッキンズによれば、そうした愛玩用の小型犬が狩猟に用いる中型犬のスパニエルを小さくしたように見えたため、総称としてこう呼ばれたとされる (36)。しかしながら、1640年代に「婦人の膝に乗ることが許されるような小型犬」という意味をもつ “lapdog” が出現すると、この語がスパニエルに代わって小型愛玩犬を指すものとして用いられるようになった。³ ラップドッグは、主として上流階級の婦人に属する贅沢品であったため、富や特権の象徴であるとともに、女性

の劣性のあかしともされた。『イングランドの犬について』の翻訳者であるエイブラハム・フレミングは、エリザベス朝の翻訳者の例にもれず、事実を淡々と叙述したキーズのラテン語原文を恣意的にふくらませているが、いかにも熱心なプロテスタントらしく、愛玩犬のセクションに、無益な犬に惑溺する女性を怠惰や墮落の廉で非難する道徳的な一節を付け加えた。

こうした犬は小さく、可愛らしく、見目麗しく、美しく、優美な貴婦人の繊細さや放恣な女の望みを満足するために求められ、女たちが遊び戯れ、時間という宝を無駄にし、より称賛に値する活動から心を遠ざけ、墮落した欲望を虚しい気晴らしで満足させる……痴愚の道具となるのである。(20-21)

なお、「ペット」も「ラップドッグ」と関連する概念であるが、“pet”という語が、「馴致され、お気に入りとして可愛がられている動物」という、実用性ではなく愛着の対象として所有される動物という意味でOEDに初めて出現したのは、1539年である。⁴その背景には、エリカ・ファッジによれば、家の中でもに暮らしていた家畜が屋外に出され、人間の生活領域において公と私の分節化が進行していくという、生活空間の変化があった。しばしば指摘されるように、私的空間の誕生は近代個人主義の形成と軌を一にしていた。「プライバシーの増大——新しい個としての人間——が生じたのは、ペットが動物の個性性を確立しつつある時期でもあった」(“Animal” 28)とファッジが述べているように、ペットという概念の出現は、初期近代イングランドにおける空間的分節化とそれにとまなう個の成立と密接に関わっている。

キース・トマスは、屋内で飼われ、名前(とりわけ人名)が与えられ、食用にならないことを、ペットの特徴として挙げている(162-171)。そのどれもが所有者と動物の物理的、情緒的な距離の近さを表している。ペットは人間と同じ空間に住み、優しく世話をされ、コンパニオンである以外の性質は求められない。とりわけラップドッグとの距離は、フレミングが非難するように、愛玩犬が人間の身体の一部であるとも言えるほど近かった。

そうした小さな犬は……気取った女主人が胸に抱いたり、私室でともに過ごしたり、ベッドで一緒に眠ったり、食卓で肉を食べさせたり、馬車と一緒に

乗っているときには膝に乗せて唇を舐めさせたりする…… (21)

飼い主と愛玩犬が親密に交わることは、不道德である以上に、人間と動物との間の境界をめぐる根源的な不安を生じさせ、とりわけ飼い主が貴族女性であるとき、それはジェンダー、セクシュアリティ、階級をめぐるファンタジーが凝集した侵犯的な象徴性を帯びてくる。ラップドッグと女性との関係は、犬が男性の性的代用物とみなされることによってエロス化されいかにわしいものとされ、「弱き器」である女性の獸的他者性を想起させるとともに、家父長的な異性愛体制を脅かすものともなった。犬による「癒し」や「心的成長」を支配的言説とする現代のペット観とは異なり、初期近代イングランドにおいて、愛玩犬と絆を結ぶことは、社会的差異を消滅させ、人間＝マンの特権的地位をおびやかす境界侵犯的行為とみなされていた。

ラップドッグのなかで混淆する女性と動物の身体——医学者であるキーズは、愛玩犬のセクションで興味深いコメントを述べている。胃痛のある人が小型愛玩犬を胸に抱くと、体温が混じり合っただけで犬に病気がうつり人間は癒される、というのである (21-22)。おそらく、人間との距離の近さから、犬が人の病気もしょいこむと考えられたのだろう。ここから、犬が感染を媒介するという発想が生まれても不思議ではあるまい。

そもそも犬は、人間にとって、どの動物にもまして可視的で馴染み深く、人間とそれ以外の動物との連続性を意識させる存在である。そうした犬の身近さは、犬にとっては恩恵ともなれば受難ともなる。ロンドンでペストが流行すると、犬や猫が大量に殺されたのも、こうした身近な動物たちが感染を広げると信じられていたからである。なかでも犬は数多くいて——トマスが端的に述べているように、「近代初頭のイギリスには、いたるところにイヌがいた」(145)——、番犬、作業犬、猟犬、愛玩犬と、それぞれが役割をもち、人間と生活空間を共有していた。また、おびただしい数の野良犬もいた。しかしながら、すべての犬がペストのさいに虐殺されたわけではない。殺されたのは、野良犬やきちんと管理されていない街路をうろつく犬であり、1590年にロンドンで犬が駆除されたとき、貴族やジェントリが狩猟や愛玩用に所有している「グレイハウンド、スパニエル、ハウンド」は除外された (Jenner 55)。人間において疫病の致死率に身分格差があったのと同様、犬においても防疫対策の犠牲になったのは、“dog” や “bitch” と一括りにされた最も卑

しい犬であった。

そして、シェイクスピア劇におけるおそらく最も有名な動物も、まこと、この最下層の犬なのである。キーズが最後の範疇に位置づけた“cur”は、OEDによれば「犬。いまはつねに蔑称として用いられる。価値のない、育ちの悪い、あるいはかみ癖のある犬」とされ、シェイクスピアもこの語を、もっぱら犬（もしくは人）の侮蔑語として用いており、「雑種全般」という犬のタイプを指すものとしては、先に触れたマクベスの犬種カタログに用例が一つだけあるにすぎない。また形容詞の“currish”には「性悪な、卑しい」という意味があり、“cur”と呼ばれる犬が、生まれの悪さと性格の悪さを兼備する野卑な駄犬とみなされていたことがわかる。『ヴェローナの二紳士』に登場するクラブは、まさにそうした典型的な“cur”像を体現している。

犬のクラブは、“sourest-natur'd dog”(3.1.6)、“cruel-hearted cur”(3.1.9)、“the unkindest”(3.1.38)と描写され、まさに名が体を表している。というのも、“crab”には「すっぱい野生の林檎」という意味があるからである。この林檎の木はシェイクスピア時代の人々にとって馴染み深いものだったため、犬の名前の意味はすぐ理解できただろう。“crab”にはまた「蟹」という意味もある（そもそもこの語が“crabapple”の語源とも考えられている）。“crabbed”（「ひねくれた」、「意地悪な」）という形容詞があるように、「クラブ」という名前は、蟹の怒りっぽい習性から「いじな性格」を連想させるものである。名前の由来が「蟹」であれ「林檎」であれ、「クラブ」は、“cur”たる犬にふさわしい名前であると言える。

リチャード・ビードルは、クラブはキーズの分類によれば二番目の使役犬に当たり、そのなかの“a tinker's cur”に属するだろうと述べているが(12)、これは正確ではない。というのも、鋳掛屋の連れている雑種犬は、荷物を運ぶ手助けをするだけでなく、あちこち行商して回る主人を守る護身犬としての役割を果たし、忍耐力と主人への忠誠が特徴であるとされているからである。クラブは、何の仕事をするわけでもなく無情だとされているうえ、「紳士風の犬たち」(4.4.21)の対極にある犬として描かれており、キーズの分類の最下層に属する「雑種で野卑な類」(34)であることは明らかである。

トマスは、近代イギリスにおいて人間と動物の区分をゆるがす振舞いについて述べているが、それらはほぼ、食事や行儀における作法に関わるものと、肉欲や排泄といった肉体的欲求に関わるものに分けられる。とりわけ、アリ

ソン・ステュワートの言うように、一六世紀ヨーロッパにおいて犬や豚は大食や飲酒や野蠻で受け容れがたい振舞いの象徴であり、ドイツの人文主義者たちはエラスムスを始めとして、犬を悪い食事作法と結びつけている (21-34)。身体や本能を人間の「動物性」すなわち「野蠻」が発露する場とみなし、それらを理性によって抑制し、節度ある振舞いをめざすことが人間のあかしであるとするのは、文明の進歩が自然の征服と軌を一にしてきた西欧の歴史と社会に通底する見解である。

そうした「野蠻」の見本として描かれているのが、クラブである。プロテーウスがシルヴィアに贈ろうとした貴婦人の愛玩用の「小さな宝石」(4.4.47) は盗まれてしまった。道化じみた召使のラーンスは、自分の飼い犬であるクラブを代わりに渡そうとするが、クラブは皿から鶏の足を盗んだり貴婦人のスカートに放尿したりして騒動を引き起こす。食卓の下には他の「紳士風の犬たち」もいたが、そうした無作法を働いたのは雑種犬のクラブだけであった。シルヴィアはいみじくも言う——「これは下種犬 (“cur”) だから、こんな贈り物には下種犬風の (“currish”) 唸り声のお礼でたくさんだわ」(4.4.48-50)。

エリカ・ファッジによれば、クラブの狼藉は、礼節 (civility) が人間を人間らしくする特質であることを示すエピソードであるとされる (“dog” 195-99)。人前で尿をする犬は、公と私の区別がつかず、理性を欠き、精神が肉体を制御できない、いわば「文明化の過程」の及ばない存在であり、人間がそうであってはならないものの具現化である。礼節は人間と動物を分かちしるしであるが、人間のあいだの、そしてまた、人間社会のヒエラルキーが投影された犬のあいだの、上層階級と下層階級を分かちしるしでもある。血統もしつけも良い他の犬とは異質な存在であるクラブは、民衆に結びつけられる無秩序な獣性を想起させる。紳士とは何かを問いかける『ヴェローナの二紳士』において、クラブは、墮落した紳士の末路を示す象徴であるが、その首尾一貫したアイデンティティによってゆるぎない尊厳をも感じさせる。友人や恋人に忠誠を貫き通せないこの劇の紳士たちは、ある意味において、下種犬にも劣る存在になりさがっているのである。

しばしば指摘されるように、犬をめぐる副筋は、主筋における友情と恋愛の主題をバーレスク化している。ラーンスの愛の嘆きに応えない無情なクラブは、ペトラルカ風恋愛をパロディしているし、ラーンスがクラブに対して

示す忠誠はプロテュースのジュリアに対する不実を喜劇的にきわだたせている。また、ランスとクラブとの関係は、飼い主の過剰な献身ぶり（犬に代わって罰を受ける）や人間と犬のあいだの境界の混乱（「俺は犬——いや、犬は犬で俺は犬——ああ、犬は俺で、俺は俺」〈2.3.21-23〉）によって、初期近代イングランドにおけるペットに対する態度の一端を垣間見せてくれるとともに、道化じみた召使いと雑種犬の組み合わせは、貴族女性とペットとの関わりを滑稽化する効果もある。

しかしながら、クラブは、人間や人間社会を映し出すたんなる鏡であるだけではない。泣くことのない恩知らずの雑種犬クラブは、人間の愚かしさや残酷さを想起させるが、と同時に、象徴化を阻む存在でもある。クラブは、みなが役割を演じている演劇的な虚構と模倣の空間のなかで、人間の意に添わないリアルな犬として現前する。演技せず、あるがままに存在するクラブは、「ある種の演劇的なブラックホール」(Boehrer, "Shakespeare" 160)として機能している。舞台上に生じたその異質な裂け目は、観客をつねに引き付け、魅了し、笑わせてきた。そのいっぽうで、生きた犬が放散する無関心な自己完結性によって、クラブは比喩化をすりぬけ、人間のための意味の器になることを拒んでもいるのである。

シェイクスピア劇における動物の比喩機能を広く分析したオードリー・ヨウダによれば、劇中には4000以上の動物への言及があるとされるが(v)、そのほとんどはイメージとしての出現であり、生きた動物が舞台に登場したと思われる例はまれにしかない。そのため、動物はもっぱらその象徴的機能によって論じられてきたが、動物と見世物小屋や舞台には、さまざまな意味において、ある種の親和性がある。そもそもイギリス・ルネサンス期には馬、猿、熊、犬に芸をさせる動物ショーの人気は高く、舞台上でもリアリズムや喜劇的效果のために生きた動物が用いられた(Wright 659-60)。シェイクスピア劇においては、たとえば、『じゃじゃ馬馴らし』と『夏の夜の夢』には猟犬への言及があるが、数頭の犬が舞台に登場した可能性は排除できない。というのも、マイケル・ドブソンが、舞台で生きた狩猟犬が用いられたと考えられる例を、同時代の記録をもとにいくつか挙げているからである(116-17)。『冬物語』の「熊に追われて退場」という印象的なト書きの「熊」は、グロブ座に隣接する熊いじめ場から訓練された熊を借りてくることもできたかもしれないが、おそらくは人間が熊の格好をして演じ、滑稽な効果をもたら

したと思われる。舞台上の動物は、ほとんどはたんなる小道具でしかなく、劇のアクションに有機的に関わっているわけではない。しかしながら、近年のアニマル・スタディーズの進展によって、擬人化を拒む物質的存在としての動物が焦点化されるとともに、イギリス・ルネサンス期における動物役者の演劇的機能が注目されつつある。生きた動物は御しがたく、エネルギーに満ち、その「予測不能性と人間ではない動物がもつ行為主体性」(Armstrong 70)によって、舞台上の人間中心主義をあっさりとは無効化できるのである。

そもそも犬は、他のいかなる動物にもまして、人間中心主義によるとめどない搾取の最大の対象となってきた。犬は最古の家畜であり、人類が狩猟採集生活を送っていたころから共存してきた。そうした犬の身近さは、ラップドッグの愛玩と野良犬の虐殺に見られるように、ときに矛盾した反応を人間に起こさせるが、人間に都合よく利用されているという点では変わりはない。あるときは自己のなかにとりこまれ、あるときは他者として排斥される——犬は、あまりに身近であるがゆえに、擬人化しやすく種の線引きがしにくい動物でもある。また、人間と同じ哺乳類として、入手しやすい犬は実験動物として広く用いられている。犬は、人間と似ているために殺される一方、観念上では人間とは異なる畜生として蔑まれる、

西洋文明の歴史が始まって以来、人間はつねに動物を支配の対象とし、みずからを概念化するための認識装置として用いてきた。しかしながら、人間を絶対的な優越者として理性と精神の極に置き、動物を他者として範疇化するという発想は、啓蒙主義時代の産物である。人間が自然の諸力からきっぱりと切断される前のシェイクスピア時代には、厳格な二項対立にはおさまりきれない、多様でより豊かな生き物の風景が広がっていた。ローリー・シャノンの指摘によれば、シェイクスピアの作品において、“beast”は141回、“creature”は127回用いられているが、“animal”という語は8回しか出現せず、OEDにおいても包括的な語としての“animal”の用例は16世紀の終わりまでほとんど見られない(474)。

コギト以前には、「大文字の動物」などというものは存在しなかった。複数形の生き物(creatures)はいた。複数形の野獣(brutes)がいて、複数形の獣(beasts)がいた。魚と鳥がいた。生きとし生けるものたちがいた。人間たち(humans)がいた……これらの人間たちは、動物たちに対してと同じ

く天使たちとの対比によっても測られており……狭量なデカルト以降の<人間／動物>の分節化よりもより大きな宇宙像、組織、「世界観」のなかに座を占めていた。(Shannon 474)

エリザベス朝における、「存在の連鎖」という中世以来の伝統的な宇宙観によれば、人間は天使と獣の間に位置しており、理性をいかに行使するかによって天使のごとき高みへと昇っていくこともできれば、獣の次元まで墮ちていくこともできるとされた。階層性と連続性によって特徴づけられるこの宇宙観において、すべての存在は、神から無生物にいたるまで整然とした位階秩序をなしているが、連続しているため、それぞれの境界は曖昧である。すなわち、人間はすべての被造物の頂点にあるが、人間と獣との差異は本質的なものではなく可変的なもの、ないしは程度によるものであり、両者のあいだに明確な線引きはなしえない。そして、人間はいとも容易に獣と同一線上に並びうるのだ。そうした宇宙観から生じるのは、人間の絶対的な優位性についての確信ではなく、人間が獣に退行してしまうのではないかという不安であり、人間の中に獣性が潜んでいるという認識である。

シェイクスピアはしばしば登場人物の性格を動物にたくして描写したが、ヨウダによれば、動物のイメージはほとんどの場合、それが当てはめられている人間の批判や風刺のために用いられている(61-62)。すなわちそれは、人間性の誇示ではなく、非人間性の指標として機能しており、人間の優越性ではなく人間の弱さを示すものなのである。

人間と獣とのあいだを決定的に分ち、人間の自然界における優位性を絶対的なものにしたのがルネ・デカルトである。心身二元論を唱えたデカルトは、人間のみがその固有の特質として理性的精神をもつとし、動物は魂のないただの自動機械であるとした。この動物機械論という言説は、人間が動物を道具として用いる権利を正当化するとともに、人間と(人間以外の生き物である)動物をきっぱりと区別した。デカルト的な二分法の根底にあるのは、切断の思想である。それは動物を他者化することによって人間の絶対的優位性を確立し、人間という範疇を構築するための装置である。人間／動物のゆるぎない分節化は、われわれの動物観や、動物とのたゆみない差異化によって人間が自己形成するありようを決定づけるものとなった。

だが、このデカルト主義の遺産も批判的に検討されつつある。とりわけ、

1970年代以降のエコロジー運動や動物の権利をめぐる運動を発端とし、他者の政治学をめぐる批評理論の展開に促されて、アニマル・スタディーズが21世紀の新しい批評空間を切り開きつつある。ジェンダー、人種、セクシュアリティという人間間の分断線がいかに構築されるかが検討された後、人間とそれ以外の動物の境界が、いかなる諸力、いかなる文脈のもとで、いかに定められているのかという理解をめざす、動物論的転回がいま生じつつあると言えよう。

それはまた、認識論的転回でもある。アニマル・スタディーズは、人間中心主義（種差別主義）を問題視し、人間の種としてのありかたそのものを問い質す視座を突き付けてきた。人間／動物の分節化は、従来の文化研究が扱ってきた差異の政治学の延長線上にあると言うには、あまりにも特異で根源的な問題関心である。それは、人間とは何かという問題に関わっており、人間中心主義的な視座の見直しを広範な学問領域において促すものになるだろう。シェイクスピア批評においてもアニマル・スタディーズは、初期近代における自然と人間との関係という広い問題関心を背景に、豊かに展開しつつある。ファッジがまさに言うように、「動物について読むことは、つねに人間を通じて読むことであり…人間について読むことは動物を通じて読むことである。」（“Perceiving” 3）シェイクスピアの「ヒューマニズム」を動物という抑圧された他者の視点から問い直すこと、シェイクスピアをエコロジカルに、ポストヒューマニスト的に問い直すこと。「人間」が脱中心化される時、われわれはシェイクスピアをどのように読み直すことができるのだろうか。

注

本稿におけるシェイクスピアの作品からの引用は、すべて以下に拠る。

Evans, G. Blakemore, editor. *The Riverside Shakespeare*. Houghton Mifflin, 1974.

¹ 犬を忠実な動物として描いた例としてすぐさま想起されるのは、中世末期からルネサンスにかけての寓意的な図像や絵画（アンドレア・アルチャーティの『エンブレマタ』における「妻の忠誠」というエンブレムや、ヤン・ファン・エイクの『アルノルフィーニ夫妻の肖像』など）である。犬は聖書

では不浄な動物として扱われているが、肯定的に描かれるようになったのは、おそらくは犬の家畜化が時代とともに進行してきたためであろう。シェイクスピアは犬を冷遇しているが、ブルース・ベラーによれば、テューダー朝までには、猟犬の有用性やペットの流行によって美点が評価されるようになり、犬の「文化的地位」(“Shylock” 169-70)の向上が見られたとされる。

² 均質的な形態をもち、種類ごとにはっきりした区別があるという現代的な品種の概念は、ヴィクトリア朝中期に誕生した。ドッグ・ショーや中産階級における愛玩犬の流行、犬飼育の商業化などの要因によって、品種が爆発的に増えたのもこの時代であった。

³ ラップドッグのOED初出は1645年で、「ご婦人方がたいそう好きなラップドッグ」というジョン・イーヴリンの日記からの一節が用例として挙がっている。当然ながら、シェイクスピアの作品には“lapdog”という語は出現しないが、『ヴェローナの二紳士』には、プロテュースがシルヴィアへの贈り物とした小型愛玩犬をめぐるやりとりがある。そこでは“dog”という一般的な名称が用いられているが、「小さな宝石」(4.4.47)と言及されていることから、犬が小型で貴重であることがわかる。

⁴ 「愛玩動物」を意味する“pet”は、スコットランドと北イングランドに由来する語で、初出の用例もスコットランドにおけるものである。この語が一般化し、用例が増えてくるのは19世紀になってからである。

引用文献

- トマス、キース 『人間と自然界—近代イギリスにおける自然観の変遷』 山内昶監訳、法政大学出版局、1997年。
- Armstrong, Philip. “Shakespeare’s Animal Parts.” *Reading Literary Animals: Medieval to Modern*, edited by Karen L. Edwards, et al., Routledge, 2020.
- Boehrer, Bruce. *Shakespeare among the Animals*. Palgrave, 2002.
- . “Shylock and the Rise of the Household Pet: Thinking Social Exclusion in *The Merchant of Venice*.” *Shakespeare Quarterly*, vol.50, no.2, Summer 1999, pp.152-170.
- Beadle, Richard. “Crab’s Pedigree.” *English Comedy*, edited by Michael Corder, et al., Cambridge UP, 1994, pp.12-35.

- Caius, John. *Of Englishe Dogges, the Diversities, the Names, the Natures and the Properties*. 1576. Translated by Abraham Fleming, HardPress Publishing.
- Dobson, Michael. "A Dog at All Things." *Performance Research*, vol.5, no.2, 2000, pp.116-24.
- Fudge, Erica. "'The dog is himself' : Humans, Animals, and Self-Control in *The Two Gentlemen of Verona*." *How to Do Things with Shakespeare : New Approaches, New Essays*, edited by Laurie Maguire, Blackwell, 2008.
- . *Animal*. Reaktion Books, 2002.
- . *Perceiving Animals : Humans and Beasts in Early Modern English Culture*. Macmillan, 2000.
- Greenblatt, Stephen. "A Great Dane Goes to the Dogs." *The New York Review of Books*, 26 March 2009, pp.31-33.
- Jenner, Mark S. R. "The Great Dog Massacre." *Fear in Early Modern Society*, edited by William G. Naphy, and Penny Roberts, Manchester UP, 1997, pp.44-61.
- MacInnes, Ian. "Mastiffs and Spaniels : Gender and Nation in the English Dog." *Textual Practice*, vol.17, 2003, pp.21-40.
- Shannon, Laurie. "The Eight Animals in Shakespeare ; or, before the Human." *PMLA*, vol.124, no.2, March 2009, pp.427-79.
- Spurgeon, Caroline. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. Cambridge at the University Press, 1952.
- Stewart, Alison G. "Man's Best Friend ? Dogs and Pigs in Early Modern Germany." *Animals and Early Modern Identity*, edited by Pia F. Cuneo, Ashgate, 2014.
- Wright, Louis B. "Animal Actors on the English Stage." *PMLA*, vol.42, no.3, Sep. 1927, pp.656-69.
- Yoder, Audrey Elizabeth. *Animal Analogy in Shakespeare's Character Portrayal as Shown in his Reflection of the Aesopian Tradition and the Animal Aspect of Physiognomy*. King's Crown Press at Columbia University, 1947.